

教えて♪ もくじい。シリーズ⑧

身延町の文化財 Part2

もくそうによいりんかんのんざせう

● 県指定文化財 木造如意輪観音坐像（瀬戸）



方外院の本尊「如意輪観世音菩薩像」は、
右の手を頬に当て、右膝を立て如意宝珠（※1）
を持ち、衆生（生きとし生けるもの全て）の
種々の願いを聴いてくださる慈悲深い一面六臂
（※2）の像です。天衣の条帛の結び方、腰部
に現れる納衣の曲線が藤原好みの翻波式（※3）
である点、肩の曲線のうねり具合などにより、
平安時代の終わり頃の作といわれています。

方外院は甲斐国三十三か所霊場の第二十七番
の札所であり、本像は通称「瀬戸のお観音様」
として広く知られ、古来「子授け観音」として

も信仰を集めています。毎年3月18日にだけご開帳され、町内外各地より参拝客が訪れます。



※1 あらゆる願い事を叶えてくれるありがたい玉。

※2 一つの顔に六本の臂（腕）を持つ姿。六臂は衆生がその業（行為や所作、意志による身心の活動）によって赴く六道の世界である六道（地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道）からの救済を意味します。

※3 平安時代の木彫りの仏像にみられる衣のひだの表現形式の一つ。大きいひだと小さいひだとを交互に表したもので、その断面が波が翻りまわる様に似るところからついた名。

方外院の観音様は元は本栖湖周辺に建てられたお堂に祀られており、武田信玄公が三河を攻めたときに拝んだとも伝わっている。戦国時代の終わり頃、現在地に移されそうじゃ。ちなみに左の写真はワシが彫った如意観音像じゃよ。方外院の仏像と見比べて違いなどわかるかのう。



もくじい。は、身延町立木喰の里微笑館のオリジナルキャラクター➔

● 町指定文化財 石造三十三番観音像（西嶋）

宋宝寺境内の一段高い場所に安置されています。西国三十三番霊場（※1）を巡拝した当地区の望月兵右衛門等が、各霊場の本尊観世音菩薩を勧請（※2）したものです。一体ごとに何番・何寺と刻んでありますが、文字の判読できるものは数体です。その中の一体には「寛延四年（1751）八月望月兵右衛門供養碑」と刻まれています。石材は本町の夜子沢石で、石質はもろいが彫刻は見事です。

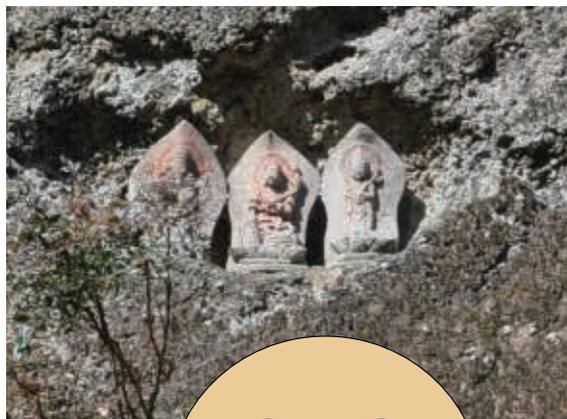
※1 現在の大阪府・京都府・兵庫県・奈良県・岐阜県の三十三箇所のお寺からなる観音霊場。観音菩薩が三十三の姿に変化して衆生を救うという信仰に由来します。西国霊場は日本で最も歴史が古く、11世紀ごろには成立していました。

※2 遠く離れた場所にいる神や仏に対して、こちらへ来てくれるように祈り願うこと。



● 町指定文化財 石仏観音像（一色）

斧右衛門翁が天保元年（1830）村の繁栄と安泰、自家一族の安全と息災延命の大願を立て、西国三十三番霊場を巡礼しその成就を記念して、同12年石工に依頼、所有の山林の岩壁に33体の石仏を安置しました。盗難にあった石仏もあり、現在30体が祀られています。



観音霊場は西国三十三霊場、坂東三十三霊場、秩父三十四霊場（合わせて百霊場）のほかに、国や地域ごとにも存在したんじゃ。わしの故郷丸畑にも江戸時代に村人が西国や坂東三十三霊場等を巡礼し、それを記念して建てた石碑がいくつもあって、ワシの父伊藤六兵衛が建てた石碑も残っておるよ。江戸時代、農民や町人など庶民の移動は厳しく制限されたんじゃが、信仰を目的とする旅は許されたんじゃ。遠い場所への旅は当然お金もかかる。旅費を出し合って代表者が神社やお寺に参詣する“代参”もよく行われていたようじゃ。西嶋や一色の石造物からは当時の人々の信仰心の篤さだけでなく、庶民の文化レベルの高まりも感じることができるのう。

②



● 町指定文化財 庚申塚 (江尻窪)



旧早川往還(※)の路傍の巨石の上に立てられた庚申塔群の一つです。高さ3m余の立派な石塔で、江尻窪の日輪寺から南側へはいった細い路沿いにあります。造立は明和元年(1764)で、塔身部に邪鬼を踏まえた六手の青面金剛を刻み、上方に日月、下方に鶏と、見ざる言わざる聞かざるの三猿を刻んでいます。庚申信仰は、人間の体の中に住む三尸という虫が庚申の夜眠っている間に出てその人の罪科を天帝に告げるという道教の考えから起こりました。そのためその夜は眠らないで一堂に集まり、お経を唱え、その後酒食をとり夜を明かすという、半ば楽しい習慣が江戸時代各地で流行しました。

※ 本町の切石より夜子沢に入り、中山・江尻窪を経て早川町笹走に出た道。駿州から舟運で運ばれ、切石河岸で荷揚げされた物資が、馬の背によりこの道を往来した光景は昭和初期まで続きました。

昔の人は自分の干支を十干と十二支(※)を組み合わせた、60通りの組み合わせで数えておった。60才の人を還暦と呼ぶのは生まれ年の干支に還ることに由来するんじゃないよ。



※十干(甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸)と十二支(子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥)を組み合わせ、年や日を表すことは中国から伝わりました。これが干支ですが、日本では干支を陰陽説に基づく五行(木・火・土・金・水)に当てはめ、さらにそれぞれを兄と弟に分け、十二支と組み合わせて年、日を表すことが広く行われています。※今年(2023年)の干支は癸卯です。

	干支		訓読み	音読み		干支		訓読み	音読み
	干	支				干	支		
1	甲	子	きのえね	コウシ	31	甲	午	きのえうま	コウゴ
2	乙	丑	きのとうし	イツチュウ	32	乙	未	きのとひつじ	イツビ
3	丙	寅	ひのえとら	ヘイイン	33	丙	申	ひのえさる	ヘイシン
4	丁	卯	ひのとう	テイポウ	34	丁	酉	ひのととり	テイユウ
5	戊	辰	つちのえたつ	ボシン	35	戊	戌	つちのえいぬ	ボジュツ
6	己	巳	つちのとみ	キシ	36	己	亥	つちのとい	キガイ
7	庚	午	かのえうま	コウゴ	37	庚	子	かのえね	コウシ
8	辛	未	かのとひつじ	シンビ	38	辛	丑	かのとうし	シンチュウ
9	壬	申	みずのえさる	ジンシン	39	壬	寅	みずのえとら	ジンイン
10	癸	酉	みずのととり	キユウ	40	癸	卯	みずのとう	キポウ
11	甲	戌	きのえいぬ	コウジュツ	41	甲	辰	きのえたつ	コウシン
12	乙	亥	きのとい	イツガイ	42	乙	巳	きのとみ	イツシ
13	丙	子	ひのえね	ヘイシ	43	丙	午	ひのえうま	ヘイゴ
14	丁	丑	ひのとうし	テイチュウ	44	丁	未	ひのとひつじ	テイビ
15	戊	寅	つちのえとら	ポイン	45	戊	申	つちのえさる	ボシン
16	己	卯	つちのとう	キポウ	46	己	酉	つちのととり	キユウ
17	庚	辰	かのえたつ	コウシン	47	庚	戌	かのえいぬ	コウジュツ
18	辛	巳	かのとみ	シンシ	48	辛	亥	かのとい	シンガイ
19	壬	午	みずのえうま	ジンゴ	49	壬	子	みずのえね	ジンシ
20	癸	未	みずのとひつじ	キビ	50	癸	丑	みずのとうし	キチュウ
21	甲	申	きのえさる	コウシン	51	甲	寅	きのえとら	コウイン
22	乙	酉	きののととり	イツユウ	52	乙	卯	きののとう	イツポウ
23	丙	戌	ひのえいぬ	ヘイジュツ	53	丙	辰	ひのえたつ	ヘイシン
24	丁	亥	ひのとい	テイガイ	54	丁	巳	ひのとみ	テイシ
25	戊	子	つちのえね	ボシ	55	戊	午	つちのえうま	ポゴ
26	己	丑	つちのとうし	キチュウ	56	己	未	つちのとひつじ	キビ
27	庚	寅	かのえとら	コウイン	57	庚	申	かのえさる	コウシン
28	辛	卯	かのとう	シンポウ	58	辛	酉	かのととり	シンユウ
29	壬	辰	みずのえたつ	ジンシン	59	壬	戌	みずのえいぬ	ジンジュツ
30	癸	巳	みずのとみ	キシ	60	癸	亥	みずのとい	キガイ

● 町指定文化財 青原院の惣門（西嶋）

青原院は曹洞宗のお寺で開基は小笠原當清、天文3年（1534）の創建です。禅寺の表門を惣門と呼び、現在の惣門は天保10年（1839）に再建されました。ケヤキ材で屋根は瓦葺き、一間一戸棟門、切妻作りで、堂々とした雲形の木鼻や懸魚のまわりの彫刻が優れています。西嶋で安政2年（1855）に発生した類焼56戸におよぶ大火で当時の青原院の伽藍が失われる中、この惣門は難を逃れ、その後の地域の復興を今日まで見守ってくれています。



風雨による経年劣化を防ぐとともに地震に強くするため、近年部材に漆を塗って補強したんじゃ。また、古い瓦の一部が本堂に展示されておる。タコの形の瓦もあって、昔の瓦職人の遊び心を感じることができるんじゃ。



● 町指定文化財 吻竜

青原院本堂に入っすぐ上の鴨居にある彫刻で作者は下山村の石川七郎左衛門重甫、天保8年（1837）、68歳当時の作です。形は普通の竜であるが、口の上辺がふっくらして、やや前につき出ているので、この名がつけられたものと思われます。肢が長く前後に踏ん張って、爪は3本。色彩は、鴟吻頭竜に比べ、ややあせていますが、胴体の鱗が印象的です。竜は仏法の守護神として崇拝されています。

4



● 町指定文化財 鴟吻頭竜

本堂内陣正面の欄間にある彫刻で作者年代は「吻竜」と同じです。作者の著わした『匠家雛形増補初心伝(※)』によれば、「頭竜に類す。身魚に類す。尾鴟に類す。能く雲霧を起こし、大雨を降らす」とある。周囲に多くの雲を配し、色彩は赤、緑青、金など170年前のものとは思われない鮮やかさで、開いた尾ひれが見事です。

※下山大工の石川七郎左衛門が文化9年（1812）に発行した著書。お寺や神社の建築や彫刻の奥義を図示した書物で、大工の必読本として全国にも知られました。

● 町指定史跡 大島の古戦場



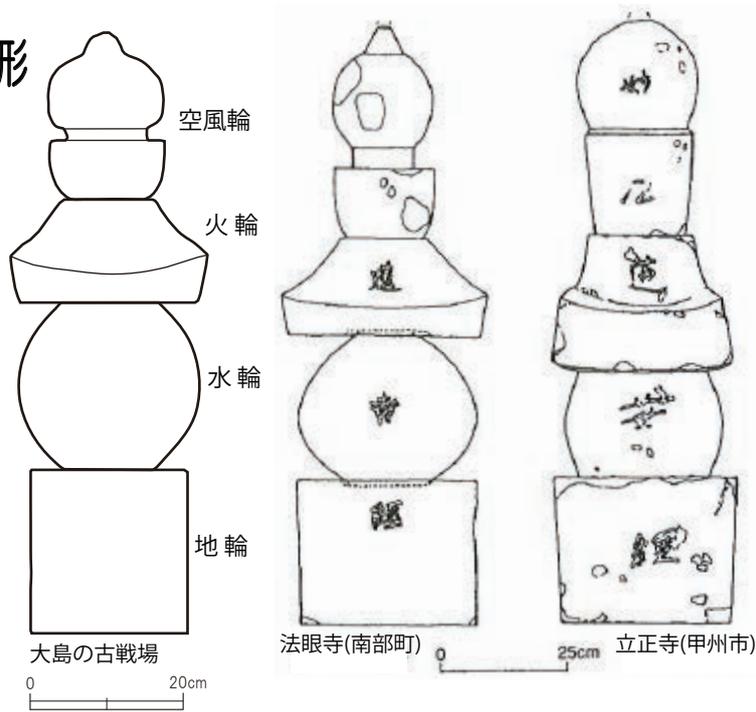
大永元年(1521年)2月28日、福島正成(※1)が兵1万5千により来襲し、南部を北上して大島で武田勢と激戦になりました。福島勢は武田軍を破り下山をへて甲府へ侵攻しましたが、飯田河原と上条河原で武田信虎(※2)に大敗しました。大島の古戦場は、武田勢が奮戦の甲斐なく敗退したと伝えられているところです。上大島集落南側に古戦場の一角が保護されており、戦で討死したつわものどもの霊を慰めんと五輪塔

(※3)がその昔を語るように今なお残っています。このとき福島勢に味方した波木井義実(※4)は、大永7年(1527)に武田信虎によって攻められ波木井の峯の城にて滅ぼされたといわれています。

※1 今川氏の家臣と伝わります。北条綱成・綱房の父で、姓は「九島」・「久島」・「櫛間」とも表記され、遠江土方城(高天神城)の城主だったといわれています。

※2 甲斐源氏第18代当主。武田氏15代当主。

※3 地・水・火・風・空の五大をそれぞれ方形・円形・三角形・半月形・宝珠形に石などでかたどり、順に積み上げた塔。古戦場の五輪塔は高さ79.5cm。年号や戒名は確認できませんが五輪の各部位に「妙法蓮華経」の文字が刻まれています。近世の火輪は軒の上下線の反りが上線のみになり、下線は平行になると指摘されており、南部町法眼寺に所在する慶長18年(1613)の塔や、甲州市勝沼町立正寺の同20年の塔に近い形態です。



※4 日蓮聖人を身延山へ招いた波木井実長の子孫。



武田信虎と福島正成の戦いの最中、信虎夫人は跡継ぎとなる男子を産んだんじゃ。勝千代と名づけられた跡継ぎの誕生に士気の上がる武田勢。その勝千代こそが後の信玄公じゃ。この戦に勝利した信虎は名実ともに甲斐国を統一したとされておるよ。

● 町指定文化財 清正公堂(身延)



戦国武将加藤清正（※1）を神とする信仰は、熱烈な法華経信者として日蓮宗信仰と結びつき、江戸時代から明治時代にかけて全国的に広まりました。逕泉坊は廃寺となっていた教泉坊復興のため逕静院日泉上人によって開創された坊で、清正公堂は文化元年（1804）に建立されましたが、嘉永7年（1854）の地震や、文久4年（1864）の火災によって焼失。現在の建物は、文久4年（1864）から明治6年（1873）にかけて再建されました。上り龍、下り龍で向拝と本堂をつなぎ、正面には松竹梅の中に尉と姥と鳥が彫刻され、柱の上端の表には唐獅子、左右には象の彫刻があります。正面の彫刻裏には、「小沢流伊豆国江奈 小沢半兵衛邦秀（※2）喜道永秀 徳蔵俊秀」の刻銘があります。喜道永秀は小沢半兵衛の次男、徳蔵俊秀は四男にあたります。小沢半兵衛親子は安政5年（1858）から三島大社の彫刻に携わり、喜道永秀は文久2年（1862）に三島で病死したため、向拝などの彫刻は、安政初期に小沢半兵衛親子が手掛けたものと考えられます。

※1 安土桃山時代から江戸時代初期にかけての武将。豊臣秀吉子飼いの家臣。関ヶ原の戦いでは東軍に味方。熊本藩初代藩主。

※2 小沢半兵衛の子に幕末の志士小沢一仙（1830-1868）がいます。一仙は彫刻家のほかに造船技師としても知られ、日本海と琵琶湖を結ぶ運河の開削を構想し、公家の高松保実に接近したといわれています。明治維新では保実の三男実村を隊長とする高松隊に参加し、京都から信濃国を経て甲斐国へ入り、甲斐国を武田時代の旧制に戻して、武田浪人の仕官と年貢半減を約束しましたが、正式な官軍が甲府城へ到着すると高松隊は勅命を得ていなかったため、帰京が命じられ解散しました。一仙は葦崎で捕まり、甲府近郊の刑場で処刑されました。

小沢一仙の墓は下山の常副寺にあり、下山大工の石川市作の弟分「朝仙院常信日秀」として葬られておるよ。



● 町指定文化財 赤石神社の石灯籠(夜子沢)

夜子沢区の「石大工由来書之事」によると、武田時代の駿州往還日下り岩道の開削の御用棟梁を以て、夜子沢石工の祖とし、新府城、菅沼城、甲府城築城時の活躍や、恵林寺境内の石燈籠から万沢の路傍の庚申塔にいたるまで、県内各地に夜子沢石工の名の石造物が散見できます。江戸中期以降は、信州高遠石工との交流も盛んで、正月の太子講(※1)での往来は、伊奈街道(※2)越えでも行われました。

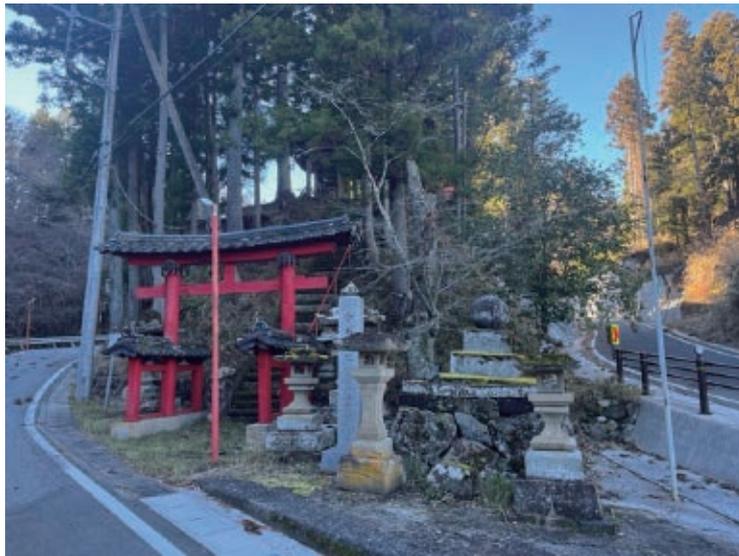
夜子沢地内の松葉田山、大石田山は「夜子沢石」の産地で、石質がやわらかく、彫刻が楽なため、石臼などに多く利用されました。赤石神社では、拝殿前の宝暦8年(1758)の石燈籠から、鳥居の傍らの明治に至る各種の石燈籠や、球形の道祖神まで夜子沢石工の技術の粋を一覧することができます。

切石の中富すこやかセンター
近くの御崎神社の裏山にも
石切場があった
そうじゃ。



※1 大工や石工、鍛冶屋などの職人仲間で聖徳太子を守護神として祀る団体。太子が寺院建築の歴史上大きな存在であったことに由来。

※2 切石から早川往還を経て南アルプスを越え、長野県の伊那地域へ往来する道。奥地の雁皮や桑皮等の林産物と富士川舟運の塩、魚等の海産物の取引を図る事を事を目的に、明治8年(1875)関係する村々



共同で街道の開削願が提出されました。上図はその時作成された絵図の一部です。昭和55年(1980)に芦安村(現南アルプス市)と長野県長谷村(現伊那市)の間に南アルプススーパー林道が開通しますが、伊奈街道の開削願はその先見性を物語る資料といえます。